



# 熊本県の救急医療体制

## ～ひとりでも多くの命を救うために～

高齢者人口の増加や疾病構造の変化などにより、救急出動件数は増加の一途をたどっており、救急医療の分野は地域医療の大きな課題となっている。こうした状況の中、熊本県ではドクターヘリと防災消防ヘリ「ひばり」が相互に役割を補完し、四つの基幹病院が連携して救急医療を行う「熊本型」ヘリ救急搬送体制を構築。その取り組みは全国から注目されている。熊本県の救急医療の中心的役割を担う基幹病院の先生方にお集まりいただき、県の救急医療の現状や課題について語ってもらった。



### 基幹病院が連携しながら 24時間体制で患者さんを救命

**笠岡** 現在、熊本県内には、救急病院が73病院、3次救急医療機関が4施設、救命救急センターが3施設あります。そのうち、3次救急医療を担う施設が熊本市内に集中しており、重症の救急患者さんに対しては、市内の3次救急医療機関への集約化が行われています。一刻を争う状況の中、患者さんの命を救うには各医療機関が連携しながら、それぞれの役割を果たしていくことが重要です。

**井** 当救命救急センターでは、「断らない救急」を目



熊本大学医学部附属病院  
救急・総合診療部  
教授 **笠岡 俊志氏**  
(かさおか・しゅんじ) 1986年山口大学医学部卒業、同年同附属病院第2内科入局。92年総合診療部助手、96年よりカリフォルニア大学アーバイン校医学部循環器部門留学。99年より山口大学医学部附属病院 先進救急医療センター講師、副部長を経て、2007年同大学院医学系研究科救急・生体複製制御医学准教授、12年より現職。



熊本赤十字病院  
副院長・救命救急センター長  
**井 清司氏**  
(い・せいし) 1976年熊本大学医学部卒業、83年より熊本赤十字病院 外科・心臓血管外科勤務。87年米国ウィスコンシン州立大学医学部臓器移植外科留学を経て、96年熊本赤十字病院 救急部長、2013年より同病院 副院長、救命救急センター長 兼 集中治療部長。熊本大学医学部臨床教授。



国立病院機構 熊本医療センター  
副院長・救命救急センター長  
**高橋 毅氏**  
(たかはし・たけし) 1985年宮崎医科大学医学部卒業、同年熊本大学医学部附属病院 代謝内科入局。92年より国立熊本病院循環器科、救命救急センター勤務。2004年国立病院機構熊本医療センター救命救急部長、12年より現職。熊本大学医学部臨床教授、熊本大学大学院客員准教授、熊本市医師会理事。



済生会熊本病院 救急総合診療センター  
救急科部長・救命救急センター長  
**前原 潤一氏**  
(まえはら・じゅんいち) 1989年大阪大学医学部卒業、91年より大阪府立千里救命救急センター、健和会病院外科、筑波メディカルセンター一病院救命救急センター勤務を経て、2000年済生会熊本病院 救急センター医長、10年より現職。熊本大学医学部臨床教授。

標に掲げ、1次～3次救急まで、あらゆる患者さんに対応できる体制で臨んでいます。また、運ばれてくる患者さんを持つだけでなく、ドクターヘリやドクターカーに同乗し、救急隊とともに現場へも赴きます。

**前原** 済生会熊本病院は、年々増え続ける救急患者さんを受け入れるため、2010年に救急総合診療センターを創設しました。救急専門医からなる「救急科」と、各診療専門医を中心とした「総合診療科」を統合し、さまざまな救急疾患に対応できる診療体制を整えています。これにより、多臓器多疾患の重症患者さんや診断が難しい患者さんなども受け入れが可能になり、シームレスに診断および治療ができるよ

うになりました。  
**高橋** 熊本医療センターは、県の救急医療体制実践として、24時間365日断らない救急医療をさらなる充実という点では、モバイル・テレメディスンの導入に期待しています。これは重症患者さんの状況を、救急車搭載カメラと12誘導心電図などにより、県下四つの3次医療機関がリアルタイムに共有できる新システムで、総務省SCOPe研究班によって開発されました。患者さんの病態に応じた、また医療機関の状況に応じた適切な病院選定、長距離搬送時のドクター監視、受け入れ体制の準備などに大変有用であります。

**笠岡** 大学病院では、救急・総合診療部医師と専門診療科からの応援医師による交代勤務で、365日24時間体制で対応。重症患者さんだけに特化せず、軽症から重症まで幅広い患者さんを受け入れています。  
**ドクターヘリと防災ヘリを活用し  
救命率の向上と後遺症軽減を図る**

**笠岡** 熊本県では迅速な救急搬送の手段として、2001年から防災消防ヘリを運用しています。12年にはドクターヘリを導入し、ドクターヘリ、防災消防ヘリによる「熊本型」ヘリ救急搬送体制がスタート。搬送時間が大幅に短縮されたことにより、医師や看護師による、現場でのより早い救命処置が可能になりました。  
**井** 当院はドクターヘリの基地病院です。ドクターヘリは救急現場へ出動して患者さんを診療し、防災消防ヘリは急患の病院間搬送を行うという役割分担をしています。もし同じ要請が重なったときには、お互いの役割をカバーする相互補完体制をとっています。たとえば、ドクターヘリが現場出動中に、別の救急事案が発生した時には、防災ヘリが医師を乗せて第2の救急現場に出動します。

**高橋** 当院は防災ヘリの基幹病院として、重篤患者さんの病院間搬送とドクターヘリの補完を担当しています。年間1500例ほどですが、トレーニングを積んだフライトドクターが365日対応しています。  
**前原** 当院もヘリ救急搬送を担う病院として、県下に二つしかない非公共用ヘリポートを完備し、ドクターヘリ、防災ヘリにより搬送された傷病者を24時間体制で受け入れています。

**井** ドクターヘリの運航に際して、初動時の速やかな情報共有が大きな課題でした。そこで、消防機関からの要請内容を四つの基幹病院が同時に共有できる電話会議システムを採用。同時通話システムにより、相互に連携しながら救急医療を行うことが可能になりました。また、熊本県の特徴的な取り組みとして、病院間搬送の際には、受け入れ病院側の医師がドクターヘリに同乗するようにしています。地元の病院の医師が同乗すると復路が大変であることに加え、地域によっては病院に医師不在という状況を招きかねません。搬送先の医師が乗ることその問題は解消され、受け入れ病院への指示も適切に行うことができます。

### 14の拠点病院にDMAT配置 迅速で適切な災害医療活動を

**笠岡** 熊本県の場合、阿蘇山の噴火や水害などが想定されますが、そういう災害時の医療も救急医療の役割のひとつです。県では2年前に、被災地域で災

害派遣医療チーム(DMAT)や医療救護チームなどの調整を行う「災害医療コーディネーター」を設置しました。

**井** 災害医療の準備は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に始まりました。翌年に熊本県公的病院災害ネットワーク協定が締結され、熊本県の基幹災害拠点病院である当院は、翌々年より県下の公的病院や災害拠点病院の救護班要員の方々に研修会を開催し、現在も継続しています。研修内容は標準の災害医療や外傷初期診療コースを取り入れ、その後始まったDMAT隊員養成の先駆けにもなりました。

**高橋** 当医療センターも災害拠点病院に指定されており、2組のDMAT隊を有するDMAT指定医療機関です。さらに、厚生労働科学研究班の一員として、災害時の日本DMATと国立病院機構の連携についての研究を担当しています。

**前原** 当院も災害拠点病院として、大規模災害に対応できる体制づくりに力を入れています。東日本大震災の際にも医療活動に参加しました。その経験から、被災地では災害医療コーディネーターと行政が連携することで、より円滑な医療活動を展開できると実感しました。日本の救急医療体制は都道府県が作成する医療計画に基づいています。熊本県の救急医療体制の構築がうまくいっているのは、現場の努力はもちろんですが、行政の理解と支援によるところが大きいと思います。現在県下にある14の全災害拠点病院にDMAT21チームが配置されていますが、今後も計画的な増隊が県主導で予定されています。

### 救急医療は地域のセーフティネット 専門医育成を課題にさらなる充実を

**笠岡** 現在、県には救急専門医が約60名在籍しています。しかし、県内の救急病院の2割程度しか専門医が在籍していないというのが現状です。救急医療の充実を図る上で、専門医の育成と救急病院への適切な配置は重要な課題です。  
**井** 初期臨床研修で多くの症例を経験し、救急医療全体を把握できる医師の育成、今後これを目標にさまざまな取り組みを行っていきたくいですね。

**高橋** 今後、高齢者の人口増加に伴い、救急医療の必要性はますます増してくる考えられます。それに対応できるように、熊本県救急医療ネットワークのさらなる充実を努めていきたいと思っています。  
**前原** 数年前に「若手救急医の会」が大学、各救命センターの若手を中心に立ち上がり、勉強会や症例検討会を行っています。救急医療の質の向上はもちろん、救急医やプライマリーケア医の育成にも力を入れ、地域社会に貢献できればと思っています。

**笠岡** 救急医療は地域のセーフティネットであり、地域社会における重要な医療です。各病院で救急隊との研修会が行われているようですが、今後も関連諸機関と連携しながら、一人でも多くの救急患者さんの救命に努めたいと思います。

